井芹祭書評コンテストH26 応募用紙

図書名 「弱者の戦略」 著者名 稲垣栄洋 出版社 新潮社

この本は現代の競争社会を勝ち抜き、成功を収めるための戦略についてではなく、弱者が弱者として少しぶざまに見えてもしぶとく生き延びるための戦略を書いた本だ。この本の著者、稲垣栄洋は雑草生態学を専門とする農学者で、「弱肉強食」といわれる自然界で、強い生物だけでなく、弱い生物も立派に生き延びて子孫を残しているのはなぜか、というテーマについて書いているのだ。

私たちが「強い生物」として真っ先に思い浮かべるのは百獣の王ライオンだが、シマウマがライオンに食べ尽くされてしまったという話は聞かないだろう。むしろ、絶滅が心配されているのはライオンやトラ、オオカミなど、私たちが「強い」と思い込んでいる肉食獣の方だったりする。自然界における「強さ」とは、なにも、1対1の勝負に勝つことではなく、種として生き残ることだと考えれば、「強い・弱い」という概念自体が激しく揺らぎ始めるのだ。また、とりわけ興味深いのは同じ種内におけるオスの生き延び方だ。強いオスと戦っても到底かなわないオスは自ら競争を避け、活動時間を他のオスがいない時間帯にシフトしたり、強いオスにひかれて近寄ってきたメスを奪い取る戦略に出るものもいる。そうやって「小さく弱い」遺伝子も次の世代へと受け継がれていくのだ。

「競争に強いことだけが成功の条件ではない。弱者であることこそが、戦略的な強みである。」という言葉がこの本のいたるところに書かれている。ミミズやオケラ、アメンボなどの小さく弱い生物たちには、弱いがゆえに編み出したすさまじい生存戦略がある。彼らがたくましく生きていることが、自然界の豊かな多様性をつくり出す原動力になっているのだと考えると、自然の奥の深さを感じることができるだろう。

600